

玉縁の縫製について ——凹型と凸型の縫製——  
 九女大家政 〇藤弘 洋子

〔目的〕衣服の縫製にあたっては、バイアスを用いることが多い。衿ぐり、袖ぐりなどを玉縁で仕立てる場合は、ややつり加減に、切替線など凸型に玉縁をとる場合はややいせ加減に縫製する。この場合のつり加減、いせ加減が用いる布地によって異なるかどうか、またどの程度のつり加減、いせ加減が必要かを検討した。

〔方法〕標準体型バスト82cmの衿ぐりは、曲率半径7cm位の弧をえがく。一般に衿ぐり、袖ぐりなどを玉縁で仕立てる場合は玉縁の幅0.8cmが最も美しい。4種の布地を用いて、つり分、いせ分をかえ、1種の試料につき各枚ずつ計96枚を縫製した。

衣服は着用すると必ず洗濯処理を行なう。洗濯処理前と処理後の玉縁の揺らぎ加減を、Scheffeの対比較法別法を用いて官能検査を行ない、分散分析し比較した。また順位法によってどの位のいせ加減、つり加減がよいか順位づけた。被検者は九女大家政学部4年生10名である。

〔結果〕1. 衿ぐりなど凹型に玉縁をとる場合は、地縫の際に1〜1.5cmつり加減に縫製し、凸型に玉縁をとる場合は、地縫寸法と芯上り寸法の差だけだけいせ込んで縫製すると玉縁のなごみが多い。布地が異なっても同じ傾向がみとめられた。

2. 洗濯処理前と処理後の玉縁のなごみ具合を順位法によって比較すると、凸型の場合は完全に一致し、凹型の場合の相関も高い。分散分析結果、処理後の分散比が小さい。

3. 布地別に分散比を比較すると、ウール地の分散比が最も大きく、サテン地の分散比が小さかった。ウール地はつり加減、いせ加減の違いによってなごみ具合が大きく異なる。